

千年前の人間臭さ。

秋場啓祐 釧路校教員養成課程

学校カリキュラム開発専攻2年

「古典」と聞くとあなたはどんなイメージを浮かべるだろうか。「嫌いな教科」「わけが分からない」「必要と思わない」……様々なイメージがあるだろう。それらは学校の授業によるものといっても過言ではない。つまり、高校卒業までの古典へのイメージが一生のものになってしまうのである。

そんな現状に待ったをかけるのが本書である。著者の吉野敬介は人気予備校講師で、多くの高校生に古文を教えている。そんな彼がタイトル通り「学校では教えない古典作品」を紹介していく。吉野はこう述べている。

昔の人のバカバカしいエピソードにこそ、古文の本当の面白さが潜んでいる（まえがき）
本書で紹介していく話は学校では教えない話、つまり、教育上タブーとされる「エロ」「グロ」といった要素を含んだ話で、その多くを説話集から採っている。吉野自身、講演会等でこのような話をする、生徒には大受けだったらしい（一部の先生方からは批判されたそうだが）。そのきっかけになっているのは、「出会ったことのない作品との出会い」なのだろう。「今まで学校や塾で習ってきた古典の印象と違う、こんな作品も古典なんだ!」といった驚きと興奮が生徒の中に生まれているのである。

本書を大まかに紹介すると、①夜這おうとした男の大事な部分がなくなった話、②稚児を愛しすぎてその死骸を食べて鬼になった僧の話、③とんちで有名な一休さんの恋の話などなど、教科書では出会うことが出来そうもないきわどい話ばかりを19話収録している。

その中で私が一番驚いた話を紹介したい。

イケメンで色好みとしても有名な平貞文(平中)には、どうしても自分になびかない女がいた。何度誘っても冷たい返事ばかりなので、とうとうこの女を諦めることにした。そこで平中は「この女の便器の中を見れば絶対に嫌いになれる!」と考え、女の便器を盗んだ。いざ便器を開けてみると、クローブ(肉料理などに使用される香辛料の一種)の匂いがする。不思議に思って中をよく見ると、小便といい匂いがする大便らしきものがある。近くにあった棒で刺してみるとそれは植物を練って香をつけたものであった。女の勘の鋭さに感服した平中は、この女を諦めるどころか余計思いが強まり、なんと液体を飲み、棒で刺したのも舐めてしまった。そして、とうとう恋煩いで死んでしまった。

こんな話は「学校では教えない」。というか「教えられない」。この話が事実かどうかはわからないが、当時このような話を楽しく読んだであろう人々がいたことは紛れもない事実である。

吉野は、こうも述べている。

ここに集めた入試には出せないようなエピソードであればあるほど、そういう昔の人々の人間臭い部分がより出ていて本当に面白い。またそういうものだからこそ、これらは約千年も

の時を経ても、残され語り継がれてきた文章たちなのだ。(まえがき)

長い年月を経ても古典が語り継がれてきたのはそこに当時の生活感があるからであり、それこそが古典の面白さである。学校で出会う古典作品の多くは、みやびで美しく、でもどこか堅苦しい話ばかりである。「どうせ読むなら面白い話を読みたい！」というのが多くの児童・生徒の思いだろう。本書はそんな気持ちを満足させてくれるに違いない。本書で出会う古典には、その時代に生きていた人々の生きた証や呼吸が今でも存在しているのだから。

堅苦しい話は少しわきに置いて、わいせつでドロドロしていて、でも人間臭くて親近感がある古典の世界を感じてほしい。読んだ後、必ず「人間臭さ」があなたを包んでいるはずだ。